

高崎の商業発達史

— 高崎中心市街地の形成と変容をふまえて —

西野 寿章

目 次

- I 高崎中心市街地形成略史 1
- II 1903（明治36）年の高崎市の店舗 4
- III 高崎の老舗を訪ねて 16
- IV 高崎中心市街地の変容とこれからのを考える 25

高崎の商業発達史

一 高崎中心市街地の形成と変容をふまえて一

西野寿章

I 高崎中心市街地形成略史

(1) 近世の高崎

本書における高崎市を中心市街地とは、1900（明治33）年に市制を施行した時の市域のことを指している。その市域は、北は信越線の南に位置する大橋町、昭和町、南は下和田町、東は東町、西は烏川に沿った常盤町、宮元町、若松町となっている。この中心市街地の源流は、1428年に鎌倉幕府の有力な御家人の一人であった和田義盛の子孫にあたる和田義信が和田城を築城し、形成された和田宿にある（高崎市史編さん委員会『新編高崎市史 通史編3 近世』、2004年）。

1500年前後に箕輪城を築城し、現在の高崎市箕郷町、旧榛名町、倉渕町、長野堰が始まる我峰町、小埜町あたりを支配していた豪族・長野氏は、1566年に武田信玄に滅ぼされ、一時的に武田の領地となり、1582年の本能寺の変以降は北条氏直が支配したが、1590年の徳川家康の関東入国とともに井伊直政が箕輪城城主となり、知行割によって上野箕輪藩は12万石と関東最大であった（関戸明子・奥土居 尚「高崎城下町の形成過程と地域構成」、歴史地理学 180、1996年）。

徳川家康は、全国支配のための交通網整備を念頭に、和田を最適の地と選定し、防衛上も都合の良い箕輪城を和田に移すことにし、和田城址に築城した。和田城は、1590年に前田利家を大将とする北国軍に攻撃されて落城していた。井伊直政は、地名を和田から松ヶ崎に改めようとし、箕輪・龍門寺住職白菴に話したところ、白菴は「諸木には栄枯があり、物には盛衰があるのは珍しいことではありません。殿様が家康様の命令を受けて和田の地に城を築いたのは、権力の頂点に立った大名に出世されたからであります。そうであれば、『成功高大』の意味を採って高崎と名付けた方がよいのではないのでしょうか」と話し、直政は直ちに高崎と改めた（前掲『新編高崎市史 通史編3 近世』）。1598年に井伊直政が完成した高崎城に入城し、高崎藩が誕生した。

高崎には、箕輪城下から武士が移り住むようになり、職人や商人を城の郭外に住まわせ、寺院も箕輪から高崎へ移転させた。これが高崎城下町の始まりであった。城下町の区割りは井伊直政によって行われ、生活用水の確保、火災防止のための用水路を掘削し、大手門の前に連雀町を置き、それを基準として南北の地割りを行った（前掲『新編高崎市史 通史編3 近世』）。町民も武士団とともに箕輪から移され、町民は北から新紺屋町、寄合町、田町、本紺屋町、白銀町、中紺屋

町、鞆町、連雀町に移住し、鍛冶町は井伊直政が刀工を集め、現在の高崎中心市街地の骨格を形成した。その際、和田宿の町人は、本町、新町に移住させられている（前掲「高崎城下町の形成過程と地域構成」）。

1600年に関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、1601年に全国支配のために五街道を整備した。五街道とは、江戸・日本橋を起点として、京都・三条大橋に至る東海道（57宿）と中山道（67宿）、甲府を通過して下諏訪で中山道に連絡する甲州街道、日光に至る日光街道、そして日光街道・宇都宮から分岐して白河に至る奥州街道であった。高崎宿は、和田宿の時代から関東平野の北西の要衝と位置づけられていた。高崎宿は、中山道の重要な宿場町であったと同時に、江戸から越後、佐渡へ通じる三国街道の分岐点でもあった。

高崎市の中心市街地は、1619年以降に相生町、四ツ屋町、常葉町、南町、新喜町が成立して、ほぼ形成されるようになった（前掲「高崎城下町の形成過程と地域構成」）。高崎宿は、宿場町であると同時に城下町でもあったことから、周辺の宿場町とは町の構造が異なっていたとされる。

1665年における高崎城下町は328戸、1788年では441戸で構成されていた。こうした増加は、高崎城下町において商工業が発達したからであった。1703年の「高崎宿倉賀野宿往還絵図面」によれば、高崎城下には498の店舗があった。最も多かったのが茶屋43、次いで旅籠屋42、太物屋32、塩屋32、穀屋30、請酒屋29、小間物屋26、腰掛茶屋25などとなっていた。店の種類は59に及んでおり、18世紀初頭の高崎城下は商家が軒を連ね、商業都市としての姿を現していた（前掲『新編高崎市史 通史編3 近世』。「お江戸見たけりゃ高崎田町 紺の暖簾がひらひら」と詠まれたのは、有名な話である。

幕末の天保年間(1830-1843)における高崎宿の規模は、総戸数837戸、人口3,235人、旅籠15という構成であった。周辺の宿場町における旅籠の数は板鼻宿54、新町宿43、坂本宿40、倉賀野宿32となっており（根岸省三『中山道高崎宿史』高崎市社会教育振興会、1974年）、これによると、高崎宿は中山道の中心的な宿場の一つであったにも関わらず旅籠の数が少ない。これは高崎城下町の形成史と多分に関係していたのではないかと考えられる。高崎宿は、1869（明治2）年では1,597戸まで増加していた。

(2) 明治時代の高崎城下町

1904（明治37）年に刊行された『高崎繁昌記』（豊国義孝『高崎繁昌記』高崎繁昌記発行所、1904年）は、1903年の高崎城下町に軒を連ねる商家の様子を細かく伝えている。高崎は、1867（慶応3）年の新政府による府県三治の制によって岩鼻県に属し、1871（明治4）年の廃藩置県によって群馬県に属することになった。群馬県は、1872年の官営富岡製糸場の開設にあるように、日本蚕糸業の一翼を担うこととなったが、高崎は「高崎絹」の卸販売を主軸とした商都として、前橋は製糸を中心とした工業都市として発展するようになった。

戦前、主に長野県で生産された米国向けの輸出用優等糸を用いた高価な和服は、ごく僅かな人だけが着用し、多くの人達は大衆生地であった銘仙を着ていた。銘

仙は、蚕2匹で作った玉繭で挽いた玉糸を素材としていた。玉繭特有の解舒かいじょの悪さから、玉糸は太い糸であった。前橋市は、愛知県豊橋市とともに玉糸の一大産地であった。その一方、同時期の中山道の宿場町として発展してきた高崎市は、1690（元禄3）年に絹市場が開設されて以降、周辺の農村において座繰によって生産された絹が城下町に集まり賑わいを見せていた。明治以降においても、高崎市のそうした地域的性格は維持され、多くの製糸企業が立地した前橋市とは対照的だった。

群馬県西毛地方は旧村を単位とした座繰製糸を主体とした組合製糸が発達したこともあって、高崎市に立地した製糸工場は、1886（明治19）年に歌川町に設立された茂木製糸場と、1902（明治35）年に八島町に設立された西毛地方の組合製糸・碓氷社の高崎分工場が特筆される程度である。高崎市は、近世の賑わいを明治以降も引き継いで、絹市場としての役割を担っていた。1885（明治18）年には、群馬県生絹太織商同業組合が設立され、その事務所は高崎町田町に置かれ、1894年には田町に固定市場が開設された。『高崎繁盛記』によると、1903年頃の高崎の製糸業は4軒、糸繭商42軒、生糸及び染糸商8軒があったと記録されている。高崎に集まった絹は「高崎絹」として全国に流通していた。明治に入ると、京都の友禅職人によって、新しい捺染加工技術が高崎に移植されたことから、染色工場の増加をみるようになった。

このように、戦前の前橋市は製糸都市として、高崎市は「高崎絹」市場及び加工を行う商工都市として発展した。こうした群馬県の高崎と前橋の双子都市の働きは、生糸輸出港であった横浜市の発展にも寄与し、1934年には八高線が全通して高崎・横浜間が八王子を経て結ばれるようになった。現在も横浜銀行が前橋市と高崎市に、群馬銀行が横浜市ほか神奈川県下に出店しているのは、こうした歴史によっている。

蚕糸業地帯にあって高崎市が製糸工業都市とならず、近世以来の絹市場としての機能を維持し、城下町、宿場町の両機能の中で商業都市として発展したのは、五街道時代に引き続いて、近代交通の要衝となったこととも関連するように考えられる。

日本最初の鉄道は、1872（明治5）年の新橋・横浜間であった。1881年に上野・青森間の鉄道建設を目的とした日本鉄道会社が設立され、東海道よりも優先着工された中山道鉄道計画によって1883年には熊谷まで、1884年には高崎まで開通した。高崎は、中山道と三国街道、例幣使街道、また草津街道が交わる交通の要衝として栄えたが、交通が近代化されても要衝としての地域的性格は変わらなかった。鉄道の開通当時は、上野高崎間1日3往復 所要時間は4時間であった。1884年には、日本鉄道によって高崎・前橋間が開通し、後の1889年には両毛鉄道と接続した。一方、旧中山道に沿った中山道鉄道計画に沿って1885（明治18）年には官設により高崎・横川間が開通し、碓氷峠に行く手を阻まれたものの、ドイツで採用されていたアプト式によって1893（明治26）年に横川・軽井沢間が開通して直江津まで信越線が全通した。また、1893年には高崎・渋川間に馬車鉄道が開通し、1908年には高崎水力電気によって電化され、1897年には上野鉄

道（現上信電鉄）高崎・下仁田間が開通した。

1903(明治36)年における高崎駅の年間乗降客数は37万6,364人となっており、1日当りの乗降客数は1,031人と、現在（1日5万7,000人）の1.8%程度であったが、高崎は近代交通の要衝としての性格を強め（前掲『高崎繁昌記』）、旧高崎城下町は近世以来の商都としての性格をさらに強めた。

高崎町は1900（明治33）年に市制を施行し、1904年の高崎市の世帯数は6,153戸、人口33,537人であった。町別で最も世帯数、人口が多かったのは本町の380戸2,090人であった。次いで新町371戸1,599人、柳川町356戸1,917人、田町277戸1,631人、九蔵町237戸1,382人などの順となっており、1戸（世帯）当りの家族数は5.4人となっていた。

II 1903（明治36）年の高崎市の店舗

1904年に刊行された『高崎繁昌記』は、旧高崎城下町を中心として、北は三国街道沿いに市街地が伸びていた大橋町まで、南は中山道沿いの下和田町までの範囲にある店舗、何らかの営業をしていた家屋について、業種別、町別に整理している。資料1は、1903（明治36）年における現在の高崎市中心市街地の範囲にある店舗を『高崎繁昌記』の分類に従って、業種業態別に町別にまとめたものである。全てが店舗ではないが、これを集計すると1175となり、これは当時の高崎市全世帯数6,042戸の19.4%に当たる。高崎中心市街地の1903年当時の状況をこれらから探ってみることにする。

(1) 職業別地域別分布

『高崎繁昌記』では、大きく12の職業、商店に分類している。ここでの記述も、これに従う。

1) 蚕糸業に関する職業

蚕糸等に関する職業は、製糸業4、糸繭商42、生糸及び染糸商8、蚕種商13の計67店舗を数えている。この製糸業には碓氷社高崎分工場が入っていないことから、個人宅における座繰製糸を指しているものと考えられる。糸繭商は42軒と産業系では最も多く、その地域分布を見ると、糸繭商は赤坂町に最も多く、次いで本町、九蔵町、柳川町、若松町などの順に多くなっている。生糸及び染糸商は、本町に3軒あったのをはじめ、8軒となっており、糸繭商とは扱ひ品が異なっていたようである。そして蚕種商は、周辺の農家に蚕種を販売していた。蚕種商も本町に3軒あり、住吉町2軒ほか、概して市街地北部に分布している。

2) 土木其他に関する職業

次に、土木其他に関する職業は54軒となっており、土木請負業20軒、石及び材木商31軒、水車業2軒、度量衡商1軒で構成されている。土木請負業の地域分布をみると、南町に4軒、元紺屋町、新町、宮元町にそれぞれ2軒などとなっている。石及び材木商は、なぜ石と木材を同じ分類としたのか判らず、地域分布を知ることはできないが、市街地全域にあったようである。水車業は並榎町と大

橋町にあり、その立地から、長野堰の本川あるいは支川において、精米などのために使用された水車を製作していたものと推測される。

資料 1 1903(明治 36)年 高崎市街地 職業・店舗別地域別分布

町名は記載順。()内の数字は2軒以上の軒数。

店舗数	蚕糸等に関する職業(67)								
4	製糸業	田町	若松町	弓町	南町				
42	糸繭商	赤坂町(6)	南町	住吉町(2)	九蔵町(3)	新紺屋町	檜物町(2)	真町	
		新喜町	本町(4)	山田町	柳川町(3)	白銀町	中紺屋	連雀町	
		相生町(2)	新町(2)	若松町(3)	堰代町(2)	常盤町	下横町	末広町	
		新田町(2)							
8	生糸及び染糸商	赤坂町	田町	本町(3)	連雀町	中紺屋町	寄合町		
13	蚕種商	本町(3)	住吉町(2)	赤坂町	檜物町	堰代町	田町	九蔵町	
		新紺屋町	山田町	柳川町					
土木其他に関する職業(54)									
20	土木請負業	八島町	元紺屋町(2)	南町(4)	砂賀町	新町(2)	羅漢町	宮元町(2)	
		本町	弓町	並榎町	連雀町	若松町	竜見町	新田町	
31	石及び材木商	連雀町	山田町	並榎町	八島町	柳川町	元紺屋町	住吉町(2)	
		南町(2)	堰代町(2)	羅漢町	弓町	寄合町	鍛冶町	赤坂町	
		並榎町	上和田町	宮元町(2)	末広町(3)	新町(2)	大橋町	通町	
		新田町(2)	若松町						
2	水車業	並榎町	大橋町						
1	度量衡商	本町							
工業に関する職業(69)									
7	印刷業	田町	本町	九蔵町	元紺屋町	鞆町	新紺屋町	連雀町	
6	陶器商	連雀町	本町	九蔵町	田町	相生町(2)			
6	漆器商	田町(3)	本町(2)	末広町					
2	塗物業	田町	住吉町						
18	染物業	九蔵町	相生町(2)	歌川町	住吉町(2)	中紺屋町(2)	常盤町	嘉多町(2)	
		大橋町	新紺屋町	下横町	寄合町(2)	元紺屋町	赤坂町		
2	靴製造業	鞆町(2)							
1	鑄造業	歌川町							
13	金物商	田町	本町	九蔵町(2)	檜物町(3)	四ツ屋町	新田町	鞆町	
		新町	連雀町	赤坂町					
7	時計商	田町(2)	連雀町(3)	本町(2)					
2	鉄砲商	鞆町(2)							
5	写真師	新紺屋町(3)	新町	宮元町					
衣服に関する商店(106)									
39	呉服大物商	本町(8)	中紺屋町	連雀町	九蔵町(5)	田町(21)	新町	柳川町	
		寄合町							
17	絹太織商	中紺屋町	寄合町(2)	上和田町	新町	本町	田町(11)		
22	古着商	中紺屋町(10)	嘉多町	田町(6)	紺屋町(2)	鞆町	常葉町	本町	
9	綿商	常盤町	新町(2)	連雀町	本町(2)	住吉町	鍛冶町	新紺屋町	
7	洋服店	鞆町	新町	下横町	中紺屋町	嘉多町	連雀町(2)		
12	足袋商	本町(3)	新町	田町(2)	大橋町(2)	歌川町	九蔵町(2)	住吉町	

3) 工業に関する職業

次に「工業に関する職業」についてみる。ここで工業に分類されている職業は、印刷業、陶器商、漆器商、塗物商、染物業、靴製工業、鑄造業、金物業、時計商、鉄砲商、そして写真師となっている。陶器商、漆器商、塗物商、時計商、鉄砲商は、その商品販売だけを行っていたものと思われるが、それ以外は製造していたものと思われる。

ここでの分類で最も多いのは染物業である。前述したように、高崎は絹市場が発達した。高崎絹は、下等生糸や玉糸を経糸（縦糸）と緯糸（横糸）に使用して織り、染色や精練などの加工をしていない生絹と、玉糸を経糸に熨斗糸（屑糸）を緯糸にして製織した太織で、ともに着物の裏地として使用され広く需要があった。生絹と太織は、高崎周辺の農家が自家で養蚕を行い、上繭は販売に回し、残った下等繭や2匹の蚕が作る玉繭から婦女子が座繰器械で糸を挽いて製織した（高崎市史編さん委員会編『新編高崎市史 通史編4 近現代』、2004年）。1902（明治35）年には、京都の友禅染職人が来住し、布地に模様を切り抜いた型紙をあて、染料をすり込み模様を染め出す捺染業を高崎の地場産業として定着させた（前掲『新編高崎市史 通史編4 近現代』）。

また、西上州で盛んに織られた生絹を生地とし、紅絹と型板で染める紅板締めも高崎の染め物として特筆される。この紅絹と紅板締めは、着物の間着、長襦袢、裏絹として用いられ、ほとんどは京都の業者に依頼していたそうであるが、京都への依頼分を高崎の染め工場で染めるようになった。やがて化学染料が輸入されるようになり、型染めによる量産が可能になると急速に需要がなくなり、昭和の初めにはほとんど姿を消した（高崎紅の会編『よみがえる紅—高崎の絹と染色業—』2005年）。これらの染め物は、長野堰の水を利用していた。鑄造業が歌川町に見える。これは、江戸時代からの歴史を持つ、現在は八幡町に工場がある小島鉄工所である（小島鉄工所200年史刊行委員会編『小島鉄工所200年史』小島鉄工所、2009）。

4) 衣服に関する職業

衣服に関する職業には、呉服太物商、絹太織商、古着商、綿商、洋服店、足袋商が分類されている。呉服太物商は、高級な正絹着物を扱う一方で綿織物、麻織物などの太い糸で製織された織物を販売していたものと思われる。官営富岡製糸場で模範とされた上質の糸の多くは米国を中心に輸出され、戦前の日本人の着物の多くは、玉糸によって織られた銘仙であり、正絹の着物を着ていた人は限られていた（高崎経済大学地域科学研究所編『日本蚕糸業の衰退と文化伝承』、日本経済評論社、2018年）。絹太織商も、正絹で製織された呉服を扱う一方で、玉糸で織られた太絹織物を販売していた。古着商は和服の古着を販売し、綿商は布団や冬場に羽織る袖なし半纏はんてんなどに入れる綿を販売していたと思われる。足袋商も含め、衣服に関する商店の内、洋服店7店を除けば、いずれも和装を取り扱っていたものと思われる。

『高崎繁昌記』によれば、1903年の時点で高崎には7軒の洋服店があった。1925年の東京銀座における調査結果によれば、女性の服装の99%は和服で、洋

服は1%であったことから、成人女性の大部分は、この時期にあっても和服を着用していたと思われる。(矢木明夫『生活経済史』評論社、1978年)。このことから、1903年時点で洋服を着用していた女性はかなり限られていたものと考えられ、洋服は紳士服をはじめとした男性の需要が多かったのではないと考えられる。

店舗が多く立地していた地域の分布をみると、呉服太物商は田町21軒、本町8軒、絹太織商は田町11軒、古着商は中紺屋町10軒、田町6軒などとなっており、田町と隣接した中紺屋町に集中している様子が窺える。足袋商は本町3軒、田町、大橋町、九蔵町にそれぞれ2軒ずつあった。洋服店は、連雀町に2軒、鞆町、新町、下横町、中紺屋町、嘉多町にそれぞれ1軒ずつ分布しているが、呉服太物商をはじめとした和服の店が軒を連ねた田町に1軒もないのは、高崎が絹市場として栄えてきた歴史と無関係ではないように思われる。

紙荒物薪炭油下駄商(159)								
48	荒物商	田町(8)	連雀町(3)	四ツ屋町	常盤町	住吉町	九蔵町(4)	相生町(3)
		南町	赤坂町(2)	歌川町	大橋町(2)	柳川町	本町(8)	若松町(2)
		新町(3)	下横町	鞆町	新田町	寄合町(2)	白銀町	新喜町
8	紙商	九蔵町	本町(4)	田町(2)	寄合町			
3	石炭商	若松町	旭町	本町				
17	薪炭及び油類商	田町(2)	赤坂町	本町(4)	高砂町	連雀町	新田町	櫛物町
		新町(2)	大橋町	宮元町	柳川町	常盤町		
8	洋灯及び石油商	田町	九蔵町	本町	連雀町	新町	寄合町	大橋町
		新田町						
1	藍油商	四ツ屋町						
4	蠟燭商	本町	相生町	田町	赤坂町			
13	下駄商	新町(3)	田町(3)	寄合町(2)	嘉多町	九蔵町	本町	大橋町
		四ツ屋町						
19	洋物商	連雀町(5)	田町(3)	本町(9)	新町	鍛冶町		
8	袋物及び雑貨商	田町(3)	九蔵町	連雀町	通町	櫛物町	鞆町	
1	玩弄物商	田町						
1	貴金属眼鏡類商	田町						
11	小間物商	田町(3)	本町(4)	新紺屋町	連雀町	砂賀町	嘉多町	
5	書籍店	田町(3)	中紺屋町	相生町				
12	古物商	寄合町(2)	鞆町(4)	連雀町(2)	田町(2)	櫛物町	本町	
旅人宿料理店其他の飲食店(148)								
50	旅人宿	八島町(12)	新町(9)	本町(7)	田町(2)	住吉町(5)	九蔵町	砂賀町
		柳川町	赤坂町(3)	宮元町(2)	連雀町	鍛冶町	並覆町	大橋町(4)
40	下宿屋	宮元町(5)	八島町(4)	新町(3)	柳川町(2)	新田町(3)	南町	本町(3)
		田町(2)	鞆町(2)	堰代町(2)	連雀町(2)	羅漢町(2)	元紺屋町	赤坂町(4)
		通町(2)	旭町	大橋町				
18	割烹店	新町(3)	八島町(2)	柳川町(5)	本町	嘉多町	新紺屋町	若松町
		上和田町(2)	堰代町	鶴見町				
3	鰻屋	嘉多町	連雀町	八島町				

2	西洋料理	宮元町	鞆町						
9	牛肉店	柳川町(2)	鞆町(2)	寄合町	連雀町(2)	檜物町	九蔵町		
2	寿司屋	九蔵町	連雀町						
2	天麩羅屋	柳川町	新紺屋町						
16	蕎麦屋	田町	寄合町	連雀町	中紺屋町	新町(3)	本町	九蔵町	
		住吉町	八島町	相生町	柳川町	嘉多町	赤坂町(2)		
6	豆腐屋	新紺屋町	嘉多町	北通町	新町(2)	常盤町			
米穀肥料商(101)									
13	米穀肥料商	歌川町(2)	旭町(2)	本町(2)	下和田町(2)	住吉町	大橋町	末広町(2)	
		新町							
77	米穀商	檜物町(2)	新町(4)	大橋町(2)	南町(3)	本町(6)	連雀町(2)	砂賀町	
		田町(3)	新田町	相生町	赤坂町(2)	通町(3)	八島町(2)	歌川町	
		柳川町(3)	寄合町	宮元町	常盤町(2)	大橋町	新町(2)	鍛冶町	
		元紺屋町(2)	若松町(4)	末広町(4)	嘉多町	椿町(2)	並覆町	新喜町	
		旭町(3)	弓町(2)	真町	羅漢町(3)	中紺屋町	住吉町(3)	高砂町	
		九蔵町(3)	北通町						
11	肥料商	本町(4)	末広町	相生町	九蔵町	柳川町	田町	住吉町	
		旭町							

5) 紙荒物薪炭油下駄商

次に市民の日常生活に密接した紙荒物薪炭油下駄商は、『高崎繁昌記』の分類では最も多い159軒が記載されている。この中で最も多いのは、箆や箒、塵取りなどの雑貨類を売っていた荒物商の48軒であった。荒物商の分布を見ると、田町、本町ともに8軒、九蔵町4軒、連雀町と新町の3軒ずつが目立っているものの、南北に分散している。次に多いのが舶来品を販売する洋物商の19軒となっており、本町に9軒が集中し、次いで連雀町5軒、田町3軒などとなっている。何を販売していたのかはわからない。当時のエネルギー源であった薪、木炭、灯油などを販売していた薪炭及び油類商は17軒を数えていた。洋灯及び石油商は8軒となっている。高崎に電灯が灯ったのは、これらの記録が取られた翌年の1904年の高崎水力電気の創業によってであった。それまでの照明は、石油ランプが用いられ、蠟燭販売だけで成り立つ蠟燭商が4軒あったのも、こうした事情による。下駄商13軒、古物商12軒、針や糸、口紅やかんざしなどを販売した小間物店11軒など、今日ではほとんど見ることもない店舗の存在は、当時の生活の様子を浮かび上がらせる。田町に1軒だけ見える玩弄物商とは、おもちゃ屋のことである。この当時、どのようなおもちゃがあったのか興味深い。

6) 旅人宿料理店其他の飲食店

続いて旅人宿料理店其他の飲食店を見てみよう。この分類には148軒が記録され、最も多いのは旅人宿50軒、次いで下宿屋40軒となっている。旅人宿は、町別では八島町12軒、新町9軒、本町7軒、住吉町5軒の順に多くなっている。八島町、新町に多いのは言うまでもなく高崎駅での乗降客にとって便利な位置であり、住吉町も飯塚駅(現北高崎駅)に近いことから信州方面からの来高者が宿泊したのではないだろうか。本町や田町、赤坂町や宮元町の旅人宿は、商人や官公庁関係者、1883年に配置された歩兵第15連隊の関係者が利用したのだろう。

下宿屋は、交通条件が整っていない当時、高崎市にやって来た労働者が利用したものであるが、1886年に新町の民家と宮元町の西群馬第二女兒小学校の校舎を使用して西群馬郡立片岡第一高等小学校が開校しており、入学者が下宿していた可能性も考えられる。

飲食関係では、割烹店が18軒あり、柳川町5軒、新町3軒、八島町と上和田町2軒などとなっており、柳川町と高崎駅周辺に集中している。蕎麦屋は新町3軒、赤坂町2軒など16軒あった。1903年時点において牛肉店が9軒あり、その分布は柳川町、鞆町、連雀町、寄合町、檜物町、九蔵町となっている。『明治洋食事始め』（岡田哲、講談社学術文庫、2012年）によると、明治になって獣肉を食べることが許され、和風鍋に洋風素材の牛肉を取り込むようになり、関東では「牛鍋」と称した。明治元年の1868年に東京に最初の牛鍋屋が開店し、大流行した。「牛鍋」の後に関西では「すき焼き」が登場している。こうした歴史と高崎における立地の状況から、これはいわゆる肉屋ではなく、牛肉を使った料理「牛鍋」を提供していた店ではないかと思われる。店数は多くないものの、この時期に、寿司屋、鰻屋、天麩羅屋があり、西洋料理店も宮元町、鞆町にそれぞれ1軒あり、当時の食文化を窺うことができる。豆腐屋は6軒で、新町に2軒、新紺屋町、嘉多町、北通町、常磐町にそれぞれ1軒ずつあった。明治維新から36年が経ち、食文化も多様化し始めていたようである。

7) 米穀肥料商

次に「米穀肥料商」についてみる。まず米穀肥料商は米と肥料を販売していた米穀肥料商と、米だけを扱っていたと思われる米穀商、肥料だけを販売していた肥料商に分かれていた。米穀肥料商は13軒を数え、歌川町、旭町、本町などに分布しているものの、特徴的な分布は見られない。77軒あった米穀商は、本町の6軒、新町、若松町、末広町の4軒、南町、田町、通町、柳川町、旭町、羅漢町、住吉町、九蔵町にそれぞれ3軒ずつあり立地密度には高いものがある。米穀商に米穀肥料商を加えると、当時の高崎市には90軒の米穀販売店があったことになる。当時の米の販売方法を調べる必要があるが、米は重量があり輸送方法も限られていたことから、顧客との距離を短くする必要があったのかも知れない。ただし、配達があったのか、消費者が買いに行ったのかどうかはわからない。

なお、1904年10月の高崎商業会議所の調査結果によると、玄米は上等で一石(150kg相当)13,500円、10kg相当900円であった(『高崎繁昌記』, p.91)。明治以降、貢租米流通が商品流通へと変化して米穀市場が拡大した。1903年頃の1人当たりの米の消費量は年間1.022石(約10kg相当)であった(持田信三「米穀市場の近代化—大正期を中心として—」, 農業総合研究23-1, p.1, 1969年)。消費者物価指数による弊価値計算によると、1904年の10kg相当900円は、2017年価格では343万8,055円となる計算があり(yaruzou.net), しかも玄米の価格であり、精米すると9kg相当ぐらいとなることから、当時の米は、かなりの高額であったことがわかる。

8) 飲料に関する商舗

続く飲料に関する商舗は121軒を数え、酒造業、酒商、酒醬油商などが記録さ

れ、販売だけではなく、製造業も含まれている。1903年当時、高崎市には8軒の酒造業者があったと記録されている。その分布は、大橋町、本町、歌川町、九蔵町、寄合町、南町となっている。酒造業は水を不可欠とすることから、これらの酒造業は長野堰の水に依存していた可能性がある。そして酒を販売する酒商は23軒、酒と醤油をいっしょに販売した酒醤油商が30軒あり、酒を販売していた店舗は53軒あったことになる。先の米穀商とならんで、街中には多くの酒商が分布していた。

また、茶舗は13軒を数え、本町の4軒をはじめ、田町、四ツ屋町にそれぞれ2軒、連雀町、相生町、赤坂町、新紺屋町、住吉町にあった。さらに、製氷卸販売商が6軒あった。電気冷蔵庫のない時代であったことから、製氷卸販売商は、飲食店や各家庭の木とブリキで作られた冷蔵庫に氷を配達していたのだろう。煙草商は、田町4軒、九蔵町と連雀町に3軒、常盤町に2軒など33店舗あった。最後に、牛乳搾乳業に触れておきたい。1904年当時、下和田町、柳川町、赤坂町に牛乳搾乳業があった。牛乳の販売だけでなく、搾乳が行われていたようである。冷蔵、保冷輸送技術が未発達であった当時、牛乳の製造は消費地から離れた場所で行うことはできなかったからである。冷蔵、保冷輸送技術が発達すると、高崎市においても郊外へと移転したものと思われる。例えば、下小島町には、戦後も酪農家が存在していた。

飲料に関する商舗(121)									
8	酒造業	九蔵町(2)	本町	歌川町	大橋町(2)	寄合町	南町		
24	酒商	田町(3)	大橋町	本町(4)	新紺屋町	中紺屋町	新町(3)	九蔵町	
		連雀町	常盤町	寄合町	南町	通町	高砂町	鍛冶町	
		鞘町	下和田町	赤坂町					
30	酒醤油商	九蔵町	本町(2)	赤坂町	嘉多町	四ツ屋町	若松町(2)	南町(2)	
		連雀町(2)	下横町(2)	新喜町	末広町(2)	歌川町(2)	常盤町	新紺屋町(3)	
		檜物町	白銀町	高砂町	新町(2)	柳川町	住吉町		
13	茶舗	連雀町	田町(2)	本町(4)	相生町	赤坂町	四ツ屋町(2)	新紺屋町	
		住吉町							
37	煙草商	四ツ屋町	田町(4)	嘉多町	常盤町(2)	歌川町	九蔵町(3)	新町(2)	
		相生町(2)	相生町	連雀町(3)	鞘町	本町(2)	寄合町	大橋町(2)	
		檜物町	白銀町	住吉町	下横町	新紺屋町	赤坂町(2)	末広町	
		赤坂町(2)	末広町						
6	製氷卸販売商	連雀町	本町(2)	赤坂町	寄合町	新町			
3	牛乳搾乳業	下和田町	柳川町	赤坂町					
砂糖乾物青物魚商(58)									
2	砂糖乾物商	本町	連雀町						
20	青物乾物商	鞘町	柳川町(3)	新紺屋町	歌川町(2)	新町	中紺屋町	檜物町	
		田町	新喜町	堰代町	住吉町	連雀町(3)	四ツ屋町	大橋町	
		嘉多町							
8	魚商	田町	嘉多町(2)	相生町	本町	連雀町(2)	檜物町		
26	魚乾物商	田町(3)	九蔵町(3)	本町(10)	住吉町	新紺屋町(2)	赤坂町	常葉町	
		寄合町(2)	若松町	南町	堰代町				
2	漬物商	田町	本町						

砂糖並に菓子商 (61)								
4	砂糖商	赤坂町	田町(2)	羅漢町				
51	菓子商	相生町	新田町(2)	新町(6)	連雀町(2)	赤坂町(3)	並榎町	常盤町(2)
		大橋町(3)	住吉町	堰代町(2)	柳川町	嘉多町	九蔵町	新紺屋町
		八島町	若松町(2)	南町(2)	新喜町(2)	本町(7)	鞆町	檜物町(3)
		砂賀町	田町(2)	寄合町(2)	中紺屋町			
6	菓子種商	北通町	新田町	住吉町	九蔵町(2)	高砂町		
医業並に人扱に関する職業 (90)								
39	医師	柳川町(5)	羅漢町	寄合町(3)	嘉多町(4)	椿町	宮元町(3)	鞆町
		新紺屋町	連雀町(2)	元紺屋町	相生町(2)	新町	北通町	田町(2)
		若松町(2)	赤坂町	四ッ屋町	歌川町	本町	白銀町	八島町
		住吉町	堰代町	九蔵町				
7	薬剤師	田町	本町	九蔵町(2)	新町	新紺屋町	赤坂町	
15	産婆	檜物町	羅漢町(3)	鞆町	連雀町	北通町	真町	南町(2)
		田町	赤坂町(2)	住吉町	相生町			
29	葉種及び売薬商	赤坂町(2)	九蔵町(2)	田町(4)	本町(4)	連雀町(2)	新町(4)	新紺屋町
		宮元町	白銀町	若松町(2)	八島町	弓町	柳川町	相生町(2)
		山田町						
男女理髪並に湯屋 (141)								
47	理髪業	連雀町(2)	檜物町	旭町	白銀町	羅漢町	田町(4)	中紺屋町
		寄合町(3)	新喜町	南町(2)	新田町(3)	新町(3)	八島町(2)	下横町
		鍛冶町	常盤町(2)	歌川町	並榎町	住吉町(2)	大橋町(2)	新紺屋町
		九蔵町(2)	高砂町	末広町	本町(3)	嘉多町	柳川町	赤坂町
		相生町						
73	女髪結	新紺屋町(2)	新町(3)	新田町(3)	通町(5)	田町(2)	赤坂町(5)	末広町
		成田町	九蔵町(5)	高砂町(2)	椿町(3)	本町(4)	大橋町	住吉町
		相生町	歌川町	堰代町(3)	柳川町(4)	寄合町(2)	中紺屋町	羅漢町(2)
		嘉多町	鞆町	宮元町(2)	檜物町(2)	職人町	八島町(2)	元紺屋町(2)
		喜多町	竜見町(2)	鍛冶町	連雀町	大橋町	下並榎町	上和田町
		大橋町	北通町					
21	湯屋	椿町	柳川町(2)	嘉多町	新町(3)	連雀町(2)	本町	赤坂町
		白銀町	九蔵町(2)	北通町	檜物町	住吉町	上和田町	堰代町
		寄合町	新田町					

計1175

豊国義孝(1904)『高崎繁昌記』, 高崎繁昌記発行所, 37-52頁より作成。

9) 砂糖乾物青物魚商

次に「砂糖乾物青物魚商」についてみる。乾物商は、砂糖と乾物を販売した砂糖乾物商と、野菜と乾物を販売した青物乾物商に分けられている。前者は2軒、後者は20軒となっている。後者は、今で言う八百屋だと思われる。砂糖乾物商は本町と連雀町に1軒ずつ見られ、青物乾物商は柳川町と連雀町にそれぞれ3軒、歌川町に2軒などとなっている。こうした立地は、料理店の多寡と関係しているように考えられる。漬物商は田町と本町に1軒ずつ見られる。

10) 砂糖並に菓子商

さらに砂糖並に菓子商を見てみよう。この砂糖商は砂糖だけを販売している

店であろう。砂糖は奈良時代に中国の鑑真和上によって日本にもたらされていたが、庶民に砂糖が行き渡るようになったのは、明治時代に近代的な精糖技術が海外から入ってきてからであった（SUGAR LAB ホームページ）。菓子商は 51 軒を数えるが、和菓子か洋菓子か、区別が付かない。城下町では茶道が広がり、菓子文化も発達した。高崎も城下町であったことから和菓子文化が育っていたものと考えられる。町別分布では、本町に 7 軒、新町に 6 軒と集中しているほか、大橋町、赤坂町、檜物町にそれぞれ 3 軒、新田町、連雀町、常磐町、堰代町、若松町、南町、新喜町（下和田町）、田町、寄合町などでも 2 軒ずつ立地していた。

11) 医薬並に人扱に関する職業

「医薬並に人扱に関する職業」は、医師、薬剤師、産婆、薬種及び売薬商に分類されている。医師は医院を指し、薬剤師は薬局を指しているものと思われる。産婆は助産婦の旧称であり、医院を構えるというよりも、妊婦のいる家へ行って出産を助けたケースが多かったように思われる。医院に当たる医師は 39 を数え、柳川町 5 軒が最も多く、嘉多町 4 軒、寄合町と宮元町にそれぞれ 3 軒、連雀町、相生町、田町、若松町にそれぞれ 2 軒などとなっている。診療科目別になっていないため詳細はわからないが、柳川町、嘉多町、寄合町、宮元町に比較的多くの医院が立地していたのは、その地域の職業構成と多分に関係していた可能性がある。薬剤師は、比較的医院が集中している町に隣接した町に分布しているように見える。産婆は 15 軒あり、分布は羅漢町の 3 軒、南町と赤坂町の 2 軒などとなっているが、北から南まで市域をカバーするように立地していたようにも見える。薬種及び売薬商は、今で言う薬局のことを指していると思われる。田町、本町、新町にそれぞれ 4 軒あり、目抜き通りに立地していたのであろうか。

12) 男女理髪並に湯屋

最後に「男女理髪並に湯屋」を見てみよう。理髪業は 47 軒、女髪結は 73 軒を数えている。この頃の女性の服装は多くが和服であったことから、女髪結の需要が多かったものと思われる。女髪結は、店を構えたところもあったと思われるが、自宅で髪結いを行ったケースも多かったようにも思われる。そして、湯屋、すなわち銭湯は 21 軒を数えている。当時であれば、内風呂を持つ家庭は珍しく、多くの市民は湯屋に通ったと思われる。湯屋は、柳川町、新町、連雀町、九蔵町にそれぞれ 2 軒あったほか、市内をカバーするように分布していた。

(2) 業種別店舗数上位 10 位と最大集積町

資料 2 は、『高崎繁昌記』の記録から、1903 年当時、高崎市にはどのような業種の店が多かったのかをまとめたものである。店舗数が最も多かったのは米穀商の 77 店舗であった。実際には米穀肥料商の 13 軒も米穀商であったことから、米穀商は 90 店舗あったことになる。幕藩体制の崩壊と貢租米の市場流通によって、米市場は大きく変化した。このことと、米穀商の多さがどのように関係するのか興味深いところである。次いで多いのが女髪結の 73 であった。今で言う美容院であろう。前述したように、髪結いは自宅の一室で行われたこともあり、必ずしも店を構えていたわけではない。当時の女性の服装の大部分は和服であったこと

資料2 業種別店舗数 上位 10 位

	業種	店舗数	最大集積町
1	米穀商	77	本町 (6) 通町 (5)
2	女髪結	73	赤坂町 (5) 九蔵町 (5)
3	菓子商	51	本町 (7)
4	旅人宿	50	八島町 (12)
5	荒物商	48	本町 (8)
6	理髪業	47	田町 (4)
7	糸繭商	42	赤坂町 (6)
8	下宿屋	40	宮元町 (5)
9	呉服太物商	39	田町 (21)
10	煙草商	33	田町 (4)

豊国義孝 (1904) 『高崎繁昌記』 高崎繁昌記発行所, pp. 37-52 より集計, 作成。

られる。ただし, 1903 年時点における菓子商全てが和菓子屋だったかどうかはわからない。資料で見たように, 1903 年に砂糖商が 4 軒あり, 菓子種商も 6 軒あった。いわゆる駄菓子の類がこの時期に存在していたのだろうか。駄菓子が誕生したのは江戸時代だとされ, 砂糖を使用した高級なお菓子は上菓子と呼ばれ, 庶民が口にする砂糖不使用のお菓子は一文菓子, 雑菓子と呼ばれて, 明治から昭和初期の間に, これらを駄菓子と呼ぶようになったという (初見健一監修『ボクたちの駄! 菓子』オークラ出版, 2017 年)。高崎の当時の菓子商がどのような菓子を製造販売していたのか興味が尽きない。

4 位は旅人宿であった。中山道時代から高崎は交通の要衝であり, 鉄道が発達しても高崎は路線の分岐点として要衝的性格が引き継がれた。高崎駅西側の八島町に多くの旅人宿が集まっていたのは, 高崎に来る商人の宿泊が多かったものと推測される一方, 当時, 高崎上野間は 4 時間を要し, 上信越方面への中継点としても機能していたものと思われる。

以下, 5 位・荒物商 48, 6 位・理髪業 47, 7 位・糸繭商 42, 8 位・下宿屋 40, 9 位・呉服太物商 39, 10 位・煙草商 33 の順となっている。荒物商, 理髪業, 煙草商は高崎市民の生活に直結し, 糸繭商, 呉服太物商は, 蚕糸業が盛んであった当時の群馬県経済を反映していた。京都から友禪染職人が高崎にやって来て, 染色業が発達し始めるのもこの頃であった。

(3) 町別軒数上位 20 位

次に, どの町に店舗が集中していたのかを知るために, 資料 3 には町別店舗数の上位 20 位を整理した。それによると, 最も店舗が多かったのは本町の 141 軒, 次いで田町の 127 軒であった。続いて新町 81 軒, 連雀町 64 軒, 九蔵町 59 軒, 赤坂町 53 軒, 柳川町 43 軒, 住吉町 36 軒, 寄合町 35 軒, 大橋町 33 軒, 八島町

から, 髪結いの需要が多かったものと考えられる。

3 位は菓子商となっている。菓子は縄文時代にすでにあったとされ, 奈良時代には大豆餅や小豆餅があり, 鎌倉時代には羊羹があった。日本の菓子に大きな影響を与えたのは 16 世紀中葉に伝来した南蛮菓子とされ, 17 世紀後半には和菓子が大成したとされている (青木直己『図説 和菓子の歴史』ちくま学芸文庫, 2017 年)。

和菓子は, 茶道の発展とも関係し, 城下町では藩主や武士が茶道を嗜んだことから, 城下町では和菓子が発達した。高崎も城下町であったことから, 和菓子づくりは早くから発達していたものと考え

31 軒などとなっている。1903 年当時の高崎市の商店は本町、田町に集中し、1893 年に鉄道馬車として開通し、1910 年に高崎水力電気によって電車化された高崎・渋川間の鉄道路線が走る旧中山道が高崎市の目抜き通りとなり、路線沿いとその隣接地域に多くの商店や事業所があったことがわかる。

1903 年における本町と田町には、どのような店舗が軒を連ねていたのだろうか。『高崎繁昌記』は、75 の商店、職業に分類していた。資料 4 は、75 の商店、職業の内、本町、田町のそれぞれにどのような商店、職業が立地していたのかについて整理したものである。それによると、本町には 75 の商店、職業の内、49 の商店、職業が軒を連ねていた。本町で最も多かったのは魚乾物商で 10 軒もあった。次いで洋物商が 9 軒、呉服太物商と荒物商が 8 軒、旅人宿と菓子商が 7 軒、米穀商が 6 軒などとなっていた。なぜ本町に魚乾物商が 10 軒もあったのか興味深いのが、前述の馬車鉄道路線に沿った本町・住吉町・大橋町は、当時の高崎市の北の玄関としての役割も果たしていたようにも捉えられる。

一方、田町は高崎駅西口へ至る馬車鉄道路線に沿って連雀町、新町、八島町とともに商業集積地を形成していた。『高崎繁昌記』が分類していた 75 の商店、職業の内、46 が集積していた。とりわけ特徴的なのは、呉服太物商が 21 軒集積し、当時の高崎市の呉服太物商 39 店舗の過半が田町に集積していた。こうしたことから、1885（明治 18）年には群馬県生絹太織商同業組合の事務所が田町に置かれ、西毛地方の生絹太織販売業、生絹太織仲買業、染絹太織卸売業を束ねていた。

以上、『高崎繁昌記』を資料として、1903（明治 36）年当時の高崎市の商工業の様子を復元してきた。店舗や事業所の数は 1175 に達し、当時の高崎市全世帯の 19.4%を占めていた。江戸時代の一大絹市場であった高崎の機能は 1903 年においても維持され、その一方では、近代的な商店、職業も登場している様子も窺われた。高崎市は、周辺農村地域を商圈として人を集めていたと思われる一方、鉄道で結ばれた長野県、新潟県と東京の中継地としての機能を担っていたようにも思える。

なお、1903 年当時、金融機関として第二銀行高崎支店（九蔵町、本店・横浜市）、高崎銀行（寄合町）、茂木銀行高崎支店（九蔵町、本店・横浜市）、高崎積善銀行（田町）があった。

資料 3 町別件数 上位 20

	町名	店舗数
1	本町	141
2	田町	127
3	新町	81
4	連雀町	64
5	九蔵町	59
6	赤坂町	53
7	柳川町	43
8	住吉町	36
9	寄合町	35
10	大橋町	33
11	八島町	31
12	新紺屋町	28
13	相生町	27
14	鞆町	26
15	嘉多町	25
16	中紺屋町	25
17	新田町	24
18	檜物町	24
19	南町	24
20	若松町	23

豊国義孝(1904)『高崎繁昌記』
高崎繁昌記発行所, pp. 37-52 によ
り集計, 作成。

資料4 1903(明治36)年 本町と田町にあった商店・職業と軒数

商店・職業	本町	田町	商店・職業	本町	田町
製糸業	—	1	書籍店	—	3
糸繭商	4	—	古物商	1	2
生糸及び染糸商	3	1	旅人宿	7	2
蚕種商	3	1	下宿屋	3	2
土木請負業	1	—	割烹店	1	—
石及び材木商	—	—	鰻屋	—	—
水車業	—	—	西洋料理	—	—
度量衡商	1	—	牛肉店	—	—
印刷業	1	1	寿司屋	—	—
陶器商	1	1	天麩羅屋	—	—
漆器商	2	3	蕎麦屋	1	1
塗物業	—	1	豆腐屋	—	—
染物業	—	—	米穀肥料商	2	—
靴製造業	—	—	米穀商	6	3
鋳造業	—	—	肥料商	4	1
金物商	1	1	酒造業	1	—
時計商	2	2	酒商	4	3
鉄砲商	—	—	酒醬油商	2	—
写真師	—	—	茶舗	4	2
呉服太物商	8	21	煙草商	2	4
絹太織商	1	11	製氷卸販売商	2	—
古着商	1	6	牛乳搾乳業	—	—
綿商	2	—	砂糖乾物商	1	—
洋服店	—	—	青物乾物商	—	1
足袋商	3	2	魚商	1	1
荒物商	8	8	魚乾物商	10	3
紙商	4	2	漬物商	1	1
石炭商	1	—	砂糖商	—	2
薪炭及び油類商	4	2	菓子商	7	2
洋灯及び石油商	1	1	菓子種商	—	—
藍油商	—	—	医師	1	2
蠟燭商	1	1	薬剤師	1	1
下駄商	1	3	産婆	—	1
洋物商	9	3	薬種及び売薬商	4	4
袋物及び雑貨商	—	3	理髪業	3	4
玩弄物商	—	1	女髪結	4	2
貴金属眼鏡類商	—	1	湯屋	1	—
小間物商	4	3			
				141	127

Ⅲ 高崎の老舗を訪ねて

商都・高崎を構築してきたのは、言うまでもなく、高崎の商人たちである。古くから高崎で商いをされてきた老舗を訪ねて、歴史、現状について伺った。

(1) 株式会社糶屋（代表取締役・二十二代目 飯島藤平氏）

創業：1563（永禄6）年

糶屋の当主・飯島家の先祖は信州高遠の豪族で、味噌づくりをやっていた。1530年には新田氏に仕え、現在の高崎市に定着して味噌づくりをはじめている。戦国時代には、味噌はたんぱく源として重宝されていることもあり、糶屋の初代飯島藤平（飯島喜太夫）は箕輪城を築城した長野氏に仕え、城の穀物番として年貢の管理をしていた。

1563年には長野氏とわかれ現在の居住地で味噌づくりの専門を開始している。1563年という武田氏による箕輪城攻めの開始年である。多くの町人や職人が箕輪城下に留まっていた時期に戦線離脱し町人専門として和田宿に活路を求めている。糶屋が拠点置いている和田宿、そして東山道と鎌倉街道の交差した道がのちに中山道に制定されることとなり、この和田宿が交易拠点になったことなど情報力と先見性をもっている証と言えるかもしれない。現在地に居を構えたのは自然河川があったからだという。味噌づくりには水が不可欠である。現在の糶屋の東側には現在の長野堰から分かれた川があり、南側には暗渠（あんきょ）になってしまっているが城の壕からあふれた水を逃がす水路がありこの川につながっていた。

残念ながら、高遠時代より培われた味噌醸造技術も和田宿だけの消費では生計が成り立たなかった。江戸時代になって井伊直政公により地場産業が奨励されると交易が盛んになり、糶屋でも和田宿外の販売経路を求め江戸に進出するようになった。江戸での販売拠点として上野御徒町に行商用の旅館が昭和20年まで存在していた。長年にわたりこの旅館に味噌以外の生糸・木綿・反物や麦・根菜など交易商品が集められていたという。

糶屋の元々の仕事は麴菌の製造であった。蒸し米にコウジカビを繁殖させ、そこから取り出す種麴といわれる麴菌胞子を農家や旅籠などに販売することであった。麴は熟成する味噌蔵や麴室（むろ）により性能が異なったものになる。また味噌にする米の質により適した麴菌、麴と相性の良い塩そして大豆などの技術が継承されている。

このほかに味噌を発酵させる木樽も特殊な技術があった。木の伸縮を考え船大工が製造した六尺樽（深さ1.8m）といわれる容器に4.5トンもの味噌を一度にいれる。木樽は味噌



1925（大正14）年頃の糶屋（提供：糶屋）



現在の糀屋元紺屋町店



糀屋の蔵

の重量で膨張や乾燥により収縮したりする。これを解決したのが竹で編んだ箍(たが)といわれるバンドで伸縮調整をしていましたが、近年この技術も継承者不足しているため入手が困難になっている。

小売り販売については1960年代まで元紺屋町の拠点工場に併設した店舗での小売りが中心であったがこの頃より群馬県下の約40軒のスーパーマーケットにテナント店として味噌・漬物の小売り販売を開始している。糀屋は1967年に連雀町に開業した藤五デパートの発起人にもなり糀屋店舗を置くことで中心市街地の振興にも貢献していた。



江戸時代の味を復元した
糀屋の甘酒

1960年代に、糀屋の業種とは全く異なるが同業醸造業者に不可欠な糀室や工場に必要な断熱材がニーズになったことがあった。この時21代目飯島藤平は米国デトロイトを視察しアスベストと異なる断熱材ロックウールに出会う。この素材を製造販売すべく関東ロックウールという会社を設立している。現在、断熱材製造業界と建設業界を繋ぐ日本最大級の建築断熱材商社として新たなニーズに応えるており21代目の甥にあたる飯島慶太氏が経営している。この商材も味噌製造の派生商品と考えられる。

元紺屋町店は家庭内での消費材としての品揃えで、家族連れの来客店が多かった。1980年代に入りモータリゼーション(自動車社会化)の進展により加速度的に中心市街地の空洞化が進み来店者数もめっきり減少した。

1985年郊外に問屋町店をオープンし若い人をターゲットに手作り味噌教室という体

験型プログラムを展開した。現在も続く企画で年間 1500 人以上の受講者を集めている。また婦人会や団体向けに地域の公民館を利用する出張出前味噌づくり教室を開催している。地域の食育活動として小学校や幼稚園へ出前授業として味噌づくりを教えて未来の顧客づくりに余念がない。

取扱商品は糍や味噌に加えて糍たまり漬がある。時代のニーズにこたえ発酵調味料の塩糍や醤油糍に加えトマト糍なるパスタソース、糍ドレッシング、ジェラート、精肉の糍漬けそして特に人気を得ている江戸時代に製造販売していた甘酒の復刻版『糍屋藤平甘酒』や『甘酒コラーゲンぷらす』などがある。

現在は対面販売以外にネット販売に力を入れている。22 代目当主飯島藤平氏は多様化するニーズに応える為にもいつかは伝統の中で培った技術やこだわりを捨てる時期がやってくると考えている。できる限り多様化するニーズに沿った技術を考案し糍づくりを行っていくと語っている。そして、物を売るのはなく満足を売りたいとも語っている。ネット社会があるがゆえに、SNS での情報発信を積極的に行い、顧客を獲得していく姿勢はまさに時代のニーズだろう。

(2) すかや (専務取締役・須賀良二氏)

創業：1830 (天保元) 年

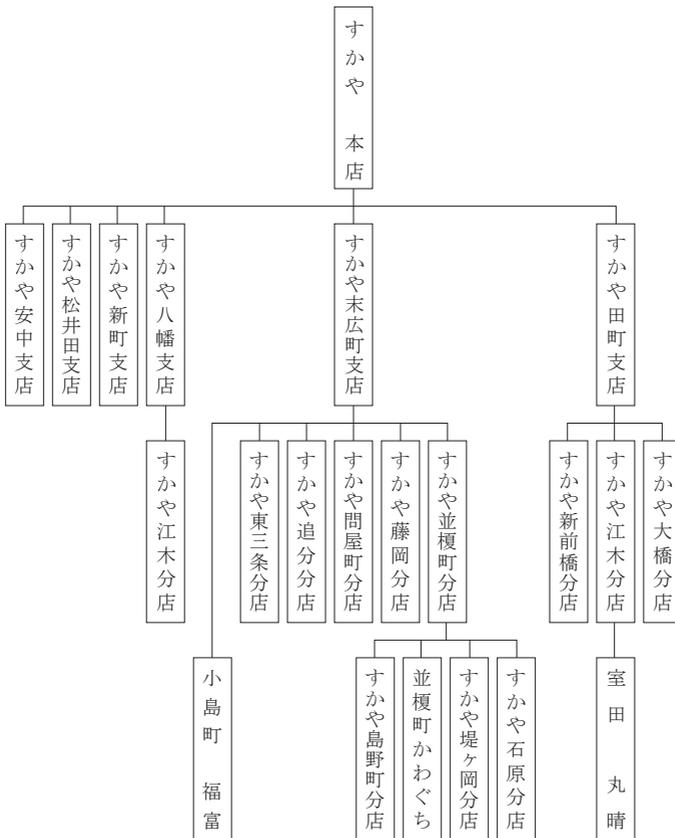
高崎市を中心として店舗展開してきたそば店である「すかや」は、最盛期には 28 店舗を有した。いわばそば店のチェーン店のようなものであるが、実際は、すかや本店で 10 年修業すれば「のれん分け」されて独立し、独立後は材料仕入れ、食味、経理の経営全般は独立採算で行うことになっている。すかや本店は、一切のロイヤルティーやマージンを受け取らず、分店創業資金の銀行借入の保証人にもなってきた。

「すかや」の創業は、1830 (天保元) 年と伝承されてきた。今般の取材に際して、須賀良二・専務取締役に須賀家の過去帳を調べていただくと、創業者とみられる須賀兵吉氏は 1848

(嘉永元) 年に亡くなっていることが判明した。このことから、天保年間創業は史実である可能性が極めて高いことがわかった。須賀兵吉氏の後を継いだ二代目・庄吉氏は 1870 (明治 3) 年まで、三代目・福蔵氏は 1917 (大正 6) 年まで、四代目・福松氏は 1953 (昭和 28) 年まで、それぞれ当主を務めた。1953 年には、現専務取締役・須賀良二氏の

		当主期間
初代	須賀 兵吉	1830 年創業～ 1848 年
二代目	須賀 庄吉	1848 ～ 1870 年
三代目	須賀 福蔵	1870 ～ 1917 年
四代目	須賀 福松	1917 ～ 1956 年
五代目	山賀 一郎	1956 ～ 1979 年
六代目	須賀みさを	1979 ～ 1988 年
七代目	須賀 通生	1988 ～ 1993 年
八代目	須賀 玲子	1993 年～現在

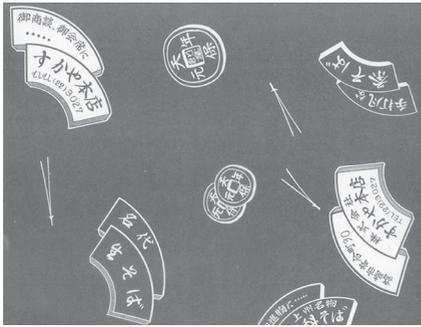
すかや 当主 系図
(聞き取り調査より作成)



すかや系図（すかや資料より作成）

お父様のお姉様のご主人であった山賀一郎氏が五代目当主となり、同年、すかやは株式会社となった。1979（昭和 54）年から六代目・須賀みさを氏が当主を務め、1988（昭和 63）年から七代目・通生氏が当主を務めた。1993 年からは、七代目・通生氏の妻である玲子氏が八代目当主となり、今日に至っている。このように、すかやの当主は今日に至るまで系図でつながり、須賀家が「すかや」を経営し、190 年の歴史を刻んできた。麦の産地である群馬県において、そば店の展開は経営上の問題が生じないのかと考えるが、高崎でうどんは1日10食程度出るだけで、9割はそばが注文されるそうである。

すかや作成の系図をご覧いただきたい。店舗数が最大だった 28 店舗全てを網羅していないが、21 店舗までが描かれている。それによれば、本店からのれん分けで独立したのは、田町、末広町、八幡、新町、松井田、安中の各支店で、田町支店からさらに大橋、江木、新前橋の各分店にのれん分けが行われ、末広町支



すかやの包装紙 (提供: すかや)



現在のすかや本店

店からは並榎町、藤岡、問屋町、追分、東三条の各分店にのれん分けが行われている。すなわち、本店からのれん分けによって独立した店は支店と称し、支店からのれん分けして独立した店を分店と称している。電話帳を調べたところ、1986年では系図以外に、岩鼻分店、小堀支店、北江木支店、鶴見支店、中居支店、鼻高分店の名前が見えている。現在は、そば店の全国チェーン店や複数以上の都道府県の範囲にチェーン店を出店している例が見られるが、地方都市において、のれん分け、しかも本店は全くマージンを取らずに店舗を増加させていった例は、高崎の「すかや」以外にあるだろうか。すかや本店では、そば類以外にカツ丼、天井、親子丼、カレーライスなどの製法も学べた。「すかや」で学んだ人達による「すかやのれん会」が年に1回催され、旧交を温めている。

こうして「すかや」の支店、分店が増加した。東京文京区にすかや直営店を出店した時期もあった。また高崎駅5番線6番線が発着するプラットホームにも出店していたこともあった。寄合町の中央銀座アーケード内にあったすかや本店には最盛期では40人の従業員がいた。そばや丼物以外に、宴席用のメニューも用意され、多くの客で賑わったが、1991年を境として中央銀座への買い物客が急激に減少したことから閉店し、現在はスズランデパート内に本店を置いている。現在の顧客は、スズランデパート周辺にある事業所や市役所などに勤務している人達を中心となっており、昼食の場として、買い物帰りの食事の場として賑わっている。

「すかや」のそば粉は、オーストラリア産、タスマニア産、北海道産をミックスし、粉は国内産と輸入品をミックスし、小麦粉と卵を混ぜた更科そばとなっている。「すかや」では、どうすれば、そばが美味しく食べられるかを常に考えており、打ち立て、ゆでたてを直ぐに出して食べていただくことを心がけている。また、鯉節とみりんによって独特の出汁も作られている。

地方都市で地域展開してきた「のれん分け」によるそば店のグループ形成は、注目される。支店、分店の多くは、人口増加や事業所増加による需要を見込んで出店したものと考えられる。中心市街地に立地した支店、分店は人口減少によって苦戦を強いられているように思われるが、「すかや」の歴史は、高崎のそば文

化を形成してきたようにも捉えられる。

(3) 株式会社豊田園（代表取締役・豊泉幸雄氏）

創業：1865（慶応元）年

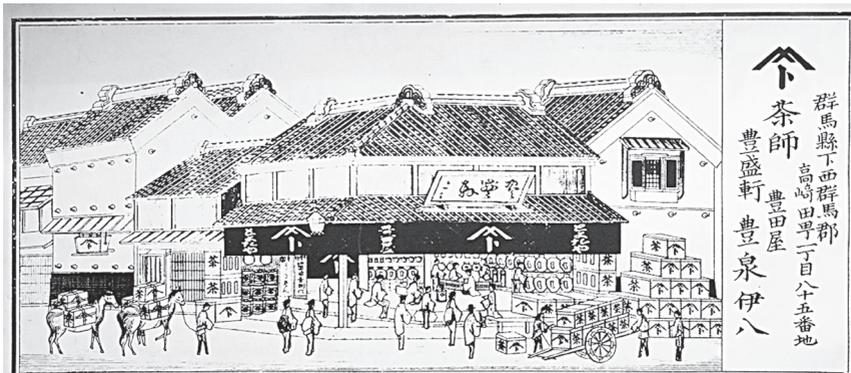
高崎中心市街地のメインストリートである旧中山道に面した田町でお茶と茶道具を販売している豊田園は、初代・豊泉伊八が1865（慶応元）年に現在の埼玉県入間市から高崎に来て創業している。『高崎繁昌記』によれば、1903（明治36）年における高崎市の茶舗は13軒あり、本町に4軒、豊田園のある田町には2軒、四ツ屋町にも2軒、連雀町、相生町、赤坂町、新紺屋町、住吉町にそれぞれ1軒があった。

三代目・豊泉倉之助の時には、茶の需要が減る夏場対策として計量器の製造販売会社を設立、群馬県内でも有数の製造会社であった。豊田園は、茶の卸問屋として始まり、三代目の時には、県外に販路を広げ、世界にも煎茶を輸出した。四代目・豊泉治男は、第二次世界大戦前後の混乱の中で家業を守り抜いた。

五代目豊泉伊三男は戦後の経済の復興、高度成長で地方問屋の必要性が薄れるのを予見して、小売業に転換した。さらに茶道具の販売をスタートした。店舗を近代ビルに建て替え2階には茶室「豊盛軒」とホールを備えた本格的な茶道設備を設置した。全国から定期的に茶道具の作家を招いて展示会を催し、地域の茶道文化の活性化を図っている。

お茶には、煎茶、抹茶、玉露など、多くの種類がある。豊田園で販売されている煎茶は、お茶の産地として有名な静岡県牧ノ原台地で栽培される一番茶葉肉を厚く栽培し、深蒸製法で作られたお茶を冷蔵庫に保管して、自社工場でパックされ、鮮度が高く、深みとコクのあるお茶であることが特徴となっている（豊田園HPより）。

日本でのお茶の歴史は、奈良時代から平安時代初期に中国より持ち込まれたことに始まるとされ、煎茶は1738年に京都・宇治の農民が開発したとされている。抹茶は、それ以前の鎌倉時代後期から南北朝時代の間に宋から持ち帰り広がった



創業当時の豊田園



豊田園での茶道具展示会（提供：豊田園）



豊田園店舗内

とされている。また、江戸時代後期にはお茶が庶民に広まったが、茶が日常的に飲まれるようになったのは明治になって高林謙三氏の製茶機械の発明により機械化によって大量生産が可能になってからであった。

聞き取りによると、高崎の中心商店街が最も栄えた1970年頃の豊田園の商圏は、高崎から50kmほどの範囲だったとされ、広範な地域から高崎中心商店街にお茶を求めて消費者がやって来た。豊田園では、全国各地の多種のお茶を扱っている専門店として、鮮度、品質にこだわって、自社工場と保管冷蔵庫を備え、ランクの上の茶葉を扱って差別化を図り、品質の高い商品を販売している。

一方、豊田園では、茶道具は、千家の流れを汲む茶の湯の道具を作り続けている千家十職の作品から稽古道具の販売も行っている。かつては、茶道が女子の教養の一端として広く普及していたが、現代では国内のみならず世界に日本文化の「茶道」として広まっている。

茶会での最高のおもてなしは茶事である。豊田園月釜と称して月毎に茶道教授、愛好家、文化人等を交えての茶事を開催している。六代目・豊泉幸雄氏は、若い世代に本物の茶道具に触れる機会を提供し、茶文化の定着を図りたいと考えている。そのために、茶道具と全国の作家に関する資料を収集し資料室を備えている。

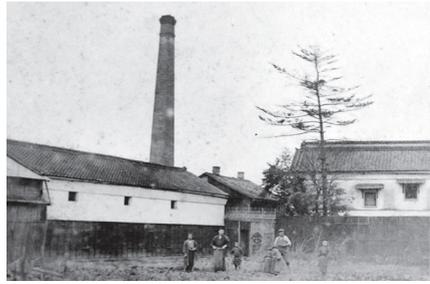


高崎の目抜き通りに面した豊田園

(4) 岡醬油醸造株式会社（代表取締役 岡 統治氏）

開店：1897（明治30）年

岡醬油醸造は、大間々町（現みどり市）に工場がある株式会社岡直三郎商店の高崎店として1897年に開店した。岡直三郎商店のルーツは、江戸時代初期に現



明治末期の岡醤油醸造（提供：岡醤油醸造）

れた近江日野商人。近江日野商人は、日野椀、合葉、醸造品を扱い、商圏は東北、関東、東海で、醸造業の小型店を多数展開し、商人組合を結成した（岡直三郎商店 230 年史編纂班『喜気如醸』, p. 11, 2017 年）。

日野商人は、日野の領主であった蒲生氏を慕って、多くの日野商人が中山道沿いに会津若松へ向かった。大間々から足尾を経由して日光へ抜けると会津への近道となることから、日野商人は大間々を拠点とするようになった。日野商人の酒造業者の多くは北関東に集中しているという。初代・岡忠兵衛が 1787（天明 7）年に大間々で醤油醸造業を開始したのは、日野出身の奥村久佐衛門が 1749（寛延 2）年に大間々で奥村酒造を開業しており、岡忠兵衛は同郷の彼を頼りにして大間々を創業の地に選んだという説がある（前掲『喜気如醸』, pp. 17-18）。群馬県は、醤油醸造に必要な麦、大豆、水が揃っていたことと、畑作地帯であることから季節によって男性労働力に豊富にあったことも、大間々を選択した背景にあると考えられている。

明治に入って、四代目・岡宗治（岡宗一郎）の時代に高崎支店が開店している。なぜ高崎の地に支店を開いたのだろうか。聞き取りによると、西毛地域では商いが成り立つと考えられたからではないかとのことであった。常盤町の烏川左岸にあった河岸では荷物が運搬されていたことも場所選定の理由として考えられる。歴史的には、中山道を介して近江と上州は結ばれており、近江日野商人にとっては地の利を得た場所であった可能性も考えられる。店が中山道に面して建てられていることから、そのようにも推測される。

高崎店には、開店当時の 27 条からなる「岡家店則」が残されており、「神仏ヲ恭敬シ」「正直ヲ旨トシ」「礼儀ヲ重ンジ」とあり、これは、神仏と礼儀、神儒仏、三者から学び取ろうとする商人の姿勢が現れているとされ、賭博や飲酒、夜間の外出を禁止する内容も含まれ、商人にとって信用が一番だということを教えている（前掲『喜気如醸』, p. 43）。

現在の岡醤油醸造は、埼玉県北部、群馬県西毛、北毛の酒屋、米穀店を中心として営業活動が行われている。昔、倉渕村や吾妻方面へ販売に出かけた際は、倉渕村権田の旅館に自転車を預けておいて、営業員はバスで権田まで行って農家へ営業に廻った。しかし、大手醤油メーカーの大量生産による安価な醤油が市場に出回るようになると、消費者は安価な醤油を選択することが多くなり、苦戦する



戦前の醤油ラベル 全国味噌醤油
品評会において優等賞を受賞



現在の岡醤油醸造の店舗

ようになった。

岡醤油醸造の醤油の製造上の特徴は、醤油の原料となる大豆、小麦を1年以上桶で寝かせて、時間をかけて醸造し、一番搾りを本醸造特級品として商品化している点にある。この製法によって、コクのある醤油を生み出している。これに対して、大手醤油メーカーの多くは、大豆、小麦を2～3ヵ月寝かせ、促成醸造菌を用いて2～3ヵ月で製造している。この手間暇のかけ方の違いが値段に反映されている。

岡醤油醸造のコクのある醤油は、醤油を調味料として使用する料理店で評判となっている。冷蔵、湿度管理が難しい生醤油は、多くのラーメン店で使用され、そのラーメン店で食した人が岡醤油醸造の醤油と知って求めるケースも多々あるという。岡醤油醸造では、使っていただいて知っていただくことが重要だと考えており、独特の製法が生み出す自社製醤油の特性を活かした営業戦略を模索し続けている。

高崎では行っていないが、本社が東京都町田市にある岡直三郎商店では通販を行っており、国産有機丸大豆と有機小麦を100%使用して、国産塩を原料に木桶で醗酵熟成させ、出来上がった一番搾り生揚げに、有機原料の麴を加え、再度醗酵熟成させた国産有機再仕込



1919(大正8)年頃の岡醤油醸造の広告

醤油が一番の売れ筋となっており、贈り物としての需要が多くなっている。

高崎支店の支配人は、滋賀県から来ていたが、1991年に滋賀県からの最後の支配人が定年により退職した。高崎での醸造は、1980年頃に原料である大豆、小麦からの製造を止め、2004年には最後の工場責任者の退職に伴い、醤油製造の全てが大間々工場に統合され、現在は販売だけとなっている。

現在の岡醤油醸造の店舗は、岡統治社長が常駐するようになってから改装され使用されている。かつての工場用地は駐車場となっているが、醤油製造当時のレンガ煙突が残り、社屋も1897年当時の建物がそのまま使われている。現在の店舗は、高崎市内では数少ない明治時代の建物として貴重な存在となっている。

IV 高崎中心市街地の変容とこれからの考える

以上、高崎の城下町、宿場町としての歴史をふまえながら、1904年に刊行された『高崎繁昌記』を資料として、1903年における高崎市の商工業の様子を復元して、状況を呈していた高崎中心市街地の歴史を振り返りつつ、老舗にもお伺いして、歴史、歩みと現状について学んできた。なぜここで、高崎中心市街地の歴史を振り返ったのか。それは、高崎中心市街地が1980年代後半より変化し続け、大きく変容してきたからであり、これからの中心市街地のあり方を考えるヒントを探るためでもあった。

戦後、高崎市は地域経済の振興を図るために、1959（昭和34）年の八幡工業団地の造成を皮切りとして、郊外に20の工業団地を造成し、一方、1967（昭和42）年には中心市街地の間屋を郊外の浜尻町に造成した卸商業団地に集約するなど、商工業都市としての性格を強めるようになった。1980（昭和55）年の関越自動車道の開通、1982（昭和57）年の上越新幹線開業は、高崎市を首都圏に組み込み、1980年代後半から90年代初頭にかけてのバブル経済期には、東京都下の地価高騰により高崎市やその周辺に土地を求め人達が流入するようになって、東京通勤圏となった。

この頃から高崎中心市街地に変化が見え始めた。聞き取り調査によると、鞆町から九蔵町に至る中央銀座の人通りは、1991（平成3）年頃から減少し始めたという。この頃は、1985（昭和60）年のプラザ合意に伴う日本の経済政策によって公定歩合が引き下げられ、住宅ブームが起こっていた。団塊の世代の住宅取得時期とも重なって、高崎市の近郊では、この頃から住宅団地の造成が顕著となっていた。このことと中央銀座の人通りの減少とは無関係ではないように思われる。城下町時代の地割りの高崎中心市街地は、結婚による家族分離が起これると、土地が狭小なため、子どもたちは郊外に土地を求めて家を建てた。郊外生活は自動車での移動を前提とし、居住空間の郊外化は、ロードサイド型商店を増加させ、駐車場が少なかった中心市街地は買い物先として敬遠されるようになったと考えられる。2006（平成18）年の旧群馬町への高崎イオンモールの開業は決定打となり、中心市街地の商業機能を低下させていくこととなった。そして、居住空間としても空洞化が進むようになる一方で、マンション建設が盛んに行れるようになった。

資料5 高崎中心市街地の町別世帯数と人口の動向

町名	世帯数			人口			1世帯当たり人員	
	1985	2020	1985/2020	1985	2020	1985/2020	1985	2020
本町	235	163	-30.6	691	283	-59.0	2.94	1.74
嘉多町	87	51	-41.4	231	94	-59.3	2.66	1.84
堰代町	55	40	-27.3	131	90	-31.3	2.38	2.25
赤坂町	227	191	-15.9	580	382	-34.1	2.56	2.00
常盤町	311	390	25.4	805	743	-7.7	2.59	1.91
歌川町	112	109	-2.7	321	232	-27.7	2.87	2.13
並榎町	1704	1607	-5.7	4619	3378	-26.9	2.71	2.10
上和田町	254	218	-14.2	646	492	-23.8	2.54	2.26
四ッ屋町	55	37	-32.7	133	76	-42.9	2.42	2.05
相生町	129	99	-23.3	331	221	-33.2	2.57	2.23
住吉町	98	82	-16.3	293	136	-53.6	2.99	1.66
請地町	309	263	-14.9	867	446	-48.6	2.81	1.70
台町	270	158	-41.5	683	320	-53.1	2.53	2.03
昭和町	448	456	1.8	1230	905	-26.4	2.75	1.98
大橋町	572	633	10.7	1658	1154	-30.4	2.90	1.82
九蔵町	135	194	43.7	422	431	2.1	3.13	2.22
高砂町	298	592	98.7	808	1189	47.2	2.71	2.01
山田町	135	110	-18.5	335	194	-42.1	2.48	1.76
椿町	58	24	-58.6	152	59	-61.2	2.62	2.46
末広町	360	508	41.1	959	1006	4.9	2.66	1.98
成田町	286	185	-35.3	764	356	-53.4	2.67	1.92
柳川町	301	236	-21.6	741	412	-44.4	2.46	1.75
新紺屋町	61	29	-52.5	168	48	-71.4	2.75	1.66
寄合町	57	43	-24.6	193	83	-57.0	3.39	1.93
羅漢町	102	100	-2.0	291	155	-46.7	2.85	1.55
真町	56	173	208.9	158	371	134.8	2.82	2.14
弓町	126	101	-19.8	342	182	-46.8	2.71	1.80
北通町	91	95	4.4	244	123	-49.6	2.68	1.29
東町	375	720	92.0	934	1470	57.4	2.49	2.04
田町	142	320	125.4	388	535	37.9	2.73	1.67
白銀町	18	24	33.3	56	39	-30.4	3.11	1.63
元紺屋町	22	110	400.0	77	140	81.8	3.50	1.27
中紺屋町	48	21	-56.3	134	39	-70.9	2.79	1.86
鞆町	74	128	73.0	203	188	-7.4	2.74	1.47
宮元町	164	194	18.3	481	411	-14.6	2.93	2.12
高松町	202	26	-87.1	619	51	-91.8	3.06	1.96
連雀町	55	255	363.6	148	547	269.6	2.69	2.15
通町	187	167	-10.7	492	319	-35.2	2.63	1.91
砂賀町	59	27	-54.2	153	43	-71.9	2.59	1.59
旭町	88	436	395.5	246	864	251.2	2.80	1.98
八島町	120	349	190.8	360	816	126.7	3.00	2.34
鶴見町	118	231	95.8	304	383	26.0	2.58	1.66
新町	174	305	75.3	506	603	19.2	2.91	1.98
檜物町	77	144	87.0	254	290	14.2	3.30	2.01
鍛冶町	42	16	-61.9	100	23	-77.0	2.38	1.44
下横町	94	68	-27.7	268	123	-54.1	2.85	1.81
若松町	521	347	-33.4	1311	616	-53.0	2.52	1.78
新田町	87	178	104.6	235	349	48.5	2.70	1.96
南町	180	179	-0.6	510	316	-38.0	2.83	1.77
下和田町	535	577	7.9	1569	1158	-26.2	2.93	2.01
竜見町	540	506	-6.3	1458	1036	-28.9	2.70	2.05
和田町	182	201	10.4	588	336	-42.9	3.23	1.67
合計 / 平均	11036	12416	12.5	30190	24256	-19.7	2.77	1.89

(高崎市資料より算出作成)

高崎駅西口は、1990年代に入って急速に再開発が進み、飲食店や小売店が入居した商業ビルが建設されるようになった。開発当初は消費者を集めたが、バブル崩壊後の長引く経済不況により多くの飲食店が閉店することとなった。その後において、長年に渡って再開発が進められていた高崎駅西口から真町あたりにかけての再開発事業が完成して道路が拡幅され、駅周辺には新しく飲食店などが開店するようになった。1976年にニチイ高崎店として開業し、2014年に閉店した高崎ビブレの跡地、ホテル跡地などにはイオンモール子会社の高崎オーパが2017年に開業して、西口は賑やかになった。こうした高崎駅西口の開発の進展は、高崎中心市街地の重心を中央銀座、田町、連雀町から西口周辺へと移動させることにもなった。さらに、2008年には高崎駅西口に大手家電小売店の本社が前橋市から移転し、2019年には高崎芸術劇場が開業、2020年には高崎競馬場跡地に群馬県がコンベンション施設Gメッセを建設したことにより、これまで高崎駅西口だけだった高崎中心市街地の範囲はGメッセまで拡張された。

こうした変化の中で、旧来の高崎中心市街地はどのように変化したのであろうか。資料5は、1985年と2020年における高崎中心市街地の世帯数と人口、1985年から2020年までの間のそれぞれの増減率と平均値、そして一世帯当たり人員を町別にまとめたものである。1985年を起点としたのは、同年のプラザ合意により日本の経済政策、産業政策がグローバル化し、ヒト、モノ、情報の流れが大きく変化したからである。端的に言えば、グローバル化により日本の政策に内発性が失われ、米国をはじめとした諸外国の影響を強く受ける受け身の政策へと転換された。1980年代後半から1990年代前半にかけてのバブル経済の生成と崩壊は、その典型であったと言ってもよい。

高崎市でも、中心市街地の地価が値上がりする一方、住宅ローン金利が1991年7月以降下降し始め、団塊の世代が住宅取得年齢に達してきたこともあって、高崎市郊外では宅地開発が盛んに行われた。そのような状況下において、城下町時代の地割りのままであった中心市街地は、地価が高く、土地が狭小であることから、世帯分離の際に若年層は郊外へと転出する動きが活発化したとも見られる。その当時の世帯主は現役世代であったが、30年が経過した今日において、従来からの中心市街地の住民の高齢化が一気に進むことになった。その一方では、バブル経済の生成による好景気によって新幹線による東京通勤が一般化し、地価が高騰した首都圏では住宅の取得が難しい人達の高崎への流入も見られるようになった。中心市街地にマンションが建ち並ぶようになり始めたのもこの時期であった。中心市街地の一部の地域では、建売住宅の分譲も行われた。

資料5によると、1985年から2020年までの35年間における高崎中心市街地の世帯数は12.5%増加したが、人口は19.7%減少している。1985年の1世帯当たり人員は2.77人であったが、2020年には1.89人へと減少している。このことは、単身世帯の増加を意味している。マンション建設による流入も見られるが、独居老人世帯の増加も考えられる。

世帯数の動向では、高松町の-87.1%と鍛冶町の-61.9%の減少が際立って高いが、これはT字路であった新町交差点から高崎市役所新庁舎へと続くシンフォ

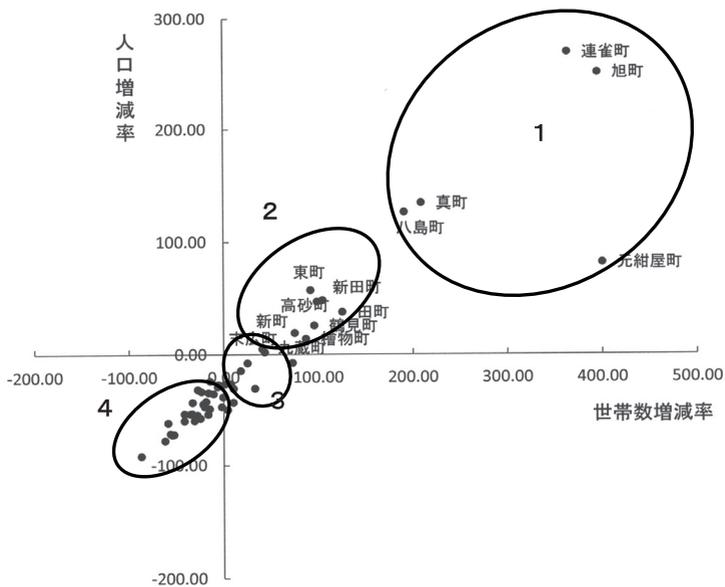


図1 高崎中心市街地 町別世帯・人口増減率と類型
(高崎市資料より作成)

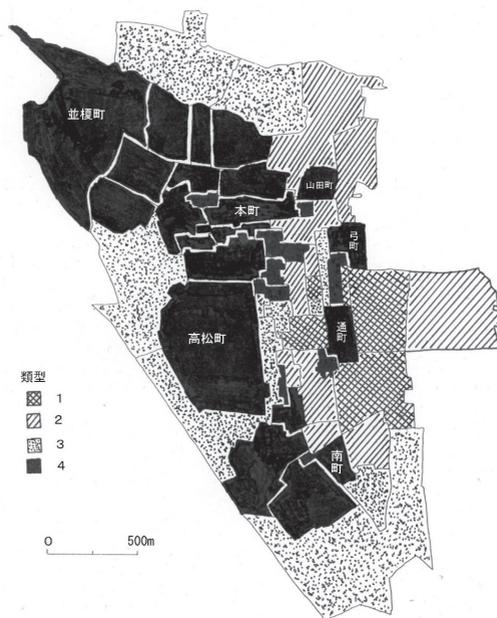


図2 1985～2020年 高崎中心市街地 町別類型の分布

ニロードの建設により多くの人立ち退いたことが大きく影響している。高松町と鍛冶町以外では、椿町、中紺屋町、砂賀町、新紺屋町で50%以上の減少をみている一方、元紺屋町では400%、旭町では395.5%、連雀町では363.6%と大幅な増加を見ており、真町でも208.9%の増加を見ている。高い減少率を示している町では店舗閉店に伴う世帯減少が考えられ、後継者世代の転出によるところが大きいと考えられる。その一方で、世帯数が急増している町では、マンション建設による居住空間の立体化が進んだ。また、35年間において、世帯数にほとんど変化の見られない町もある。歌川町、昭和町、羅漢町、北通町などである。これらの町では、転出と転入のバランスがよかった結果と思われる。

世帯数に連動した人口の動向では、高松町と鍛冶町では前述の要因により高い減少率を示している。高松町と鍛冶町以外では、本町、嘉多町、住吉町、椿町、成田町、寄合町、中紺屋町、砂賀町、下横町、若松町で50%以上減少している。その一方、真町、東町、元紺屋町、連雀町、旭町、八島町では50%以上の増加を見ており、とりわけ連雀町の269.6%、旭町の251.2%、真町の134.8%、八島町の126.7%は、マンション建設に伴い著しい増加となっている。

さらに、1世帯当たり人員の変化を町別に見ると、1985年において3.50人と最も多かった元紺屋町は2020年には1.27人と2.23人も減少し、同様に寄合町でも3.39人から1.93人へと減少している。日本全体が少子化により1世帯当たり人員を減少させているものの、2015年の全国平均は2.60人、群馬県は2.85人であった。比較には、2020年の国勢調査結果を待たねばならないが、2020年における高崎中心市街地の1世帯当たり1.89人は低いものと思われる。

図1には1985年から2020年までの高崎中心市街地の世帯と人口の増減率を示し、4つに類型化した。マンション建設により突出して世帯数と人口が増加してきた連雀町や旭町などを類型1とし、世帯数と人口とも増加しているが、類型1に比べると増加率の低い東町や新田町などを類型2とし、世帯数は増加しているものの、人口が減少している大橋町や北通町、鞆町、宮元町、下和田町、和田町を類型3とし、そして、世帯数も人口も減少している本町や嘉多町などを類型4とした。そして図2には、類型毎の地域分布を示した。

それによると、中心市街地の中心部に類型1が分布し、類型2は類型1に隣接しつつ中心部から北へと延びていることがわかる。これらはいずれもマンションや公営住宅が建設された町であり、これらが増加要因となっている。類型3は中心市街地の北と南に分布していることがわかる。そして、世帯数も人口も減少している類型4は、並榎町から南町へほぼ連続的に分布していることがわかる。マンション建設地は、概ね高崎駅の徒歩圏内に多く見られることが、このような状況を作り上げていると見られる。このように、今日の高崎中心市街地の世帯、人口の動向は、高崎駅からの距離によって規定されている一面がある一方、城下町時代の地割りが引き継がれた狭隘な土地条件もこうした状況に反映されている。

本書で見てきたように、1903年の高崎中心市街地の目抜き通りには多くの商店が建ち並び、活況を呈している様子が理解された。戦後も1980年代まで中心市街地は賑わったが、モータリゼーションの進展による生活空間と商業空間の郊

外化によって次第に消費者の足が遠退き、中央銀座をはじめとし、本町から田町、連雀町、新町へと続くバス通りから商店は次々と姿を消したり、入れ替わったりしてきた。現在の高崎駅前には、高島屋、高崎オーパが立ち並ぶ一方、郊外にはイオンモール高崎が立地して、高崎市の商業立地は高崎駅前と郊外の二極化している。消費者の多くは、交通手段によって買い物先の選択を行っているものと思われるが、長く市民の生活を支えてきた中心市街地の商業機能は衰退してきた。インターネットと宅配の普及により、今や販売商品によっては店舗販売よりもネット販売の方が販売者、消費者双方に都合が良い面もある。こうしたことから、高崎中心市街地に商業機能を復活させるのはかなり難しいと考えられる。

歴史ある高崎の中心市街地を、今後、どのように活用していくのかは、市民と行政が活発に意見交換を行う中から新たな方向性を見出す必要があるだろう。その一つの考え方を、高崎経済大学地域科学研究所編『農業用水と地域再生—高崎市・長野堰の事例—』（日本経済評論社、2021年3月刊）の終章に示した。また、本ブックレットと同時に発行する高崎経済大学ブックレット『明治以降の長野堰と高崎—これからの地域づくりへの視点を考える—』の終章にも、『農業用水と地域再生』の収録内容をやや簡略化して掲載している。併せて参照いただき、人口減少の中のまちづくりを考える一助としていただきたい。

[参考文献]

- 青木直己『図説 和菓子の歴史』ちくま学芸文庫、2017年。
岡直三郎商店230年史編纂班『喜気如醸』、2017年。
岡田哲『明治洋食事始め』講談社学術文庫、2012年。
小島鉄工所200年史刊行委員会編『小島鉄工所200年史』小島鉄工所、2009年。
関戸明子・奥土居 尚「高崎城下町の形成過程と地域構成」、歴史地理学180、1996年。
高崎経済大学地域科学研究所編『日本蚕糸業の衰退と文化伝承』、日本経済評論社、2018年。
高崎市史編さん委員会編『新編高崎市史 通史編3 近世』、2004年。
高崎市史編さん委員会編『新編高崎市史 通史編4 近現代』、2004年。
高崎紅の会編『よみがえる紅—高崎の絹と染色業—』2005年。
豊国義孝『高崎繁昌記』高崎繁昌記発行所、1904年。
根岸省三『中山道高崎宿史』高崎市社会教育振興会、1974年。
初見健一監修『ボクたちの駄！菓子』オークラ出版、2017年。
持田信三「米穀市場の近代化—大正期を中心として—」、農業総合研究23-1、1969年。
矢木明夫『生活経済史』評論社、1978年。

[付記]

本稿をまとめるに当たっては、株式会社糶屋代表取締役・二十二代飯島藤平氏ならびに同取締役・櫻井貴浩氏、株式会社すかや代表取締役・須賀玲子氏ならび

に同専務取締役・須賀良二氏，株式会社豊田園代表取締役・豊泉幸雄氏，岡醤油醸造株式会社代表取締役・岡 統治氏の各氏に多大なるご教示とご配慮をいただいた。加えて，2020年11月24日には，高崎経済大学地域科学研究所主催の第9回地域めぐりを実施し，コロナ禍の下，高崎市民とともに長年にわたって高崎中心市街地で商売を営んでこられた各店舗を巡り，歴史や現状を学ばせていただいた。ここに記して感謝申し上げます。担当者は次の通り。

なお，4店舗の聞き取り調査は，高崎経済大学西野ゼミナールの2020年度・2021年度の研究テーマ「地方のマチとムラー空洞化する中心市街地と山間集落一」の一環として，コロナ禍の下，取材先のご理解を得て，夏休みに3年生が4班に分かれて実施した。担当者は次の通り。

糀屋担当：盛田芽衣，住谷美野里，高橋愛佳

すかや担当：落合光平，須貝太智，新野拓哉，割田和磨

豊田園担当：中島志保，張 麗雲，田中ひなた

岡醤油醸造担当：橋本 薫，星野杏佳，田島早恵

[著者紹介]

西野寿章（にしのとしあき）

1957 年生まれ。高崎経済大学地域科学研究所長（2015 ～ 2020 年度）。高崎経済大学地域政策学部教授，博士（地域社会システム 愛知大学）。専門は農村地理学，経済地理学。著書に『日本地域電化史論』（日本経済評論社，2020 年），『山村における事業展開と共有林の機能』（原書房，2013 年），『現代山村地域振興論』（原書房，2008 年），『山村地域開発論』（大明堂，1998 年），『人間環境と風土』（藤田佳久・菊地俊夫との共編著，大明堂，1994 年）がある。

高崎経済大学ブックレットの刊行について

高崎経済大学の付置研究機関であります地域科学研究所では、経済学、経営学、地域政策学に係わる基礎的研究を行う一方、高崎市民、群馬県民のみなさまの生涯学習に寄与するために、公開講演会、公開講座、高崎市中央公民館との連携公開講座、地域の歴史や地域問題を学ぶ地元学講座、地域めぐり、そして中心市街地に復活し、本学学生が運営しているcafeあすなろを会場とした市民ゼミなどの事業を展開しております。

今般、高崎経済大学では、高崎市民、群馬県民のみなさまに、高崎市の歴史や現状をよりよく知っていただく一助となるよう高崎経済大学ブックレットを刊行することにいたしました。

今後、様々な角度から高崎市の過去・現在・未来を考えてまいります。一読いただき、感想をお寄せください。また、取り上げてもらいたいテーマなどがありましたら、地域科学研究所までお寄せください。お待ちしております。

第4号は、高崎中心市街地の形成と変容をふまえて、明治時代に遡り、当時の記録を活用して、高崎商業の発達状況を業種業態・職業別、町別に概観しました。そして、古くから高崎で商売をされてきた老舗の歴史と現状についても収録しました。最近の高崎中心市街地は、人口が増加している町と減少している町に大きく分化してきています。本書がこれからの高崎中心市街地再生の一助となれば幸いです。



発行 2021年3月15日
著者 西野寿章
編者 高崎経済大学地域科学研究所
〒370-0801
群馬県高崎市上並榎町1300
電話(027)344-6267
E-mail: chiikikagaku@tcue.ac.jp
©高崎経済大学地域科学研究所2021
印刷 / (有)隆美堂印刷